青嶺 seirei

文責　田中泰司

伊万里市立青嶺中学校

大盛り上がり！全校クラスマッチ

生徒会保体厚生委員会主催の全校生徒合同クラスマッチが開催されました。

目隠しして相手チームを丸めた新聞紙でたたく「気配斬り」では、爆笑プレーが随所に見られ参加者も、観戦者も一体となって大いに盛り上がりました。

また異学年男女混成チームのドッジボールでも、本気の全力プレーで一生懸命に楽しんでいました。皆が積極的に参加し生徒会の指示に従い、自主的に動く姿が見られ感心しました。

また本気の中にも、至近距離の時や女子に対しては下から投げる配慮も見られました。真剣に話を聞くときには聞く、遊ぶときには思い切り楽しむ。そんな子どもたちの姿を見て、さらに素晴らしい学校を目指して一緒に進んでいきたいと改めて思いました。

なくしたお守りと忘れ物

旅の途中、肌身離さず身に付けていたお守りが、帰国して日常に戻ったとたん、どこかにいってしまいました。探し回りましたが見つかりませんでした。随分と落ち込み親友にそのことを話したらこんなふうに言われました。「大事なものがなくなるのは、何かを引き受けてくれて身代わりになったんだよ、だから良かったじゃないか」

親友からのその言葉は自分の考え方に強く影響しました。日常生活でも何か忘れ物をして、取りに戻ることがありますが、「この時間のおかげで事故にあわないですんだ」と思います。何か見えない力はあまり実感したことはないですが、マイナスをプラスに転じる考え方は自分には合っています。

起こってしまった過去はどうしようもないですが、これからの未来は自分の考え方次第。悔やむより発想を転換し前向きに捉える。三五年前に教えてくれた親友に感謝です。皆さんはどう感じますか？

ブロークンでも全然OK！

母国語が違う人との会話は主に英語になりますが、「あなたは英語を話せますか？」と聞かれたら、どう答えますか？

ほとんどの人が「いいえ、あまり話せません」と答えるのではないでしょうか。

でも、中学校の英語を勉強してきた皆さんは堂々と「はい！話せます」と答えましょう。

「間違ったらどうしよう？」「間違わないようにしなきゃ」などと思う必要は全くありません。「間違い」なんてありません。あなたが相手に「伝えたい」、相手を「知りたい」と感じることが何よりも大切だからです。

会話（カンバセーション）だけが「コミュニケーション」ではないのです。片言の英語でも、たとえ単語だけでも相手と分かり合いたいという気持ちや姿勢さえあれば、きっと素晴らしいコミュニケーションが生まれます。

今勉強している英語を、恥ずかしがらずに、授業でも実生活でも、積極的にどんどん使ってみてください。そしてコミュニケーションが取れた喜びをたくさん味わってください。きっとこれまでのあなたたちの世界を、大きく大きく広げてくれますよ。

続・旅の装備

カナーボン渓谷にカモノハシを見に行った際にキャンプ場で、オランダ人の旅人から話しかけられました。「日本人でしょ？テントを見て分かったよ。」とのこと。

山登りはしないのですが、道具を選ぶ時には「機能的」でコンパクトになることを条件としています。装備を紹介すると、テント：ターマイト（ジャックウルフスキン）1・5人用。寝袋：ローツェ（カリマー）温かいダウン。ストーブ：アンレイテッドピークワン（コールマン）ガソリン使用可。コッフェル：ワッパーコンポ（スノーピーク）調理道具一式。

重さ・機能性と快適さのバランスで装備を決めます。ちなみにランタンは持っていかず夜はロウソクの灯りで過ごします。

何を持っていくか、いかないか。何を優先し、何に目をつぶるか。これは高校や仕事を選ぶときにも当てはまります。人生は選択の連続です。自分で判断し責任を持つならば、他人に責任を転嫁しなければ、何を選んでもよいのです。何かが一番良いという「正解」はなく、生き方や楽しみ方はそれぞれです。その違いを認め合い、尊重できる集団であってほしいなぁ…といつも思っています。

校長室より

学校だよりに旅の話をしばしば載せていますが、当時は世界のどこに行っても日本人がいたそうです。プラザ合意で円の価値が上がり、航空券の値段が下がり海外に行きやすくなる好条件も重なりました。

インターネットは当然なく、情報は「地球の歩き方」と旅人同士のロコミだけ。この頃は冷戦ではありましたが紛争は局地的で、世界は安定した状況でした。オーストラリアの次はアフリカの砂漠を走りたい、と本気で考えルートや装備品を検討したり、資金計画を立てたりしました。サハラ砂漠を越えるルートは複数あり、車やバイクで越えるのはヨーロッパの人々にとって「冒険」ではなく一つの旅の手段でした。

今はすべてのルートが封鎖されています。イスラエルの農場で働いて旅の資金をためることも出来なくなりました。憧れていたシベリア鉄道にももう乗れません。この数十年で安定状態は崩れており気軽に「旅」ができる場所も少なくなりました。

たった地球半周分の距離の国で戦いが繰り広げられています。私にとっての旅は戦争をなくすために自分ができることでした。個人レベルで知り合うことで国家間の思惑にとらわれなくなるでしょう。互いに「知る」ことを訴えるのは、争いの原因のほとんどが思い込みや無理解だと思うからです。平和な世界を取り戻すために、互いに理解する努力を決して諦めたくないと強く思います。